

# 国語

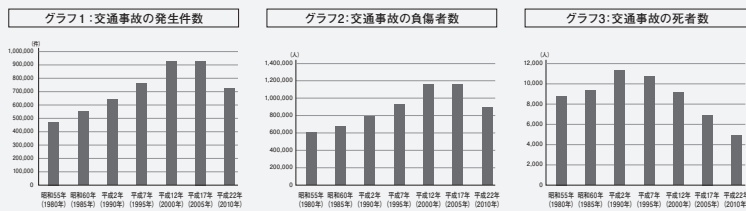
## 問題イメージ〈例1〉

多様な見方や考え方が可能な題材に関する  
複数の図表や文章を読み、情報を統合しながら、  
考えを構成し表現する問題。

分  
析

次の文章とグラフを読み、後の問いに答えよ。

次に示すのは、警察庁事故統計資料に基づいて作成された交通事故の発生件数、負傷者数、死者数のグラフと、この3つのグラフを見て、交通事故の死者数が他よりも早く、平成2年(1990年)以降減少傾向になっていることについて、4人の高校生が行った話し合いの一部である。



**Bさん:** 私は、この30年間で販売されてきた自動車の台数と安全性に関係があると思います。

(a) つまり、自動車の台数は年々増加し続けているので事故件数と負傷者数はなかなか減らなかったけれど、  ということです。

例えば、最近30年間における、「車の総販売台数の推移が分かる資料」と、「車の安全に関する装置の装備率の推移が分かる資料」があれば、このことを裏付けることができると思います。

**Cさん:** 私は、交通事故の死者数が平成2年(1990年)以降減少傾向になっているのには、医療の進歩がかかわっていると思います。交通事故にあって救急車で運ばれ一命を取り留めた人が、搬送先の病院で、「以前であれば助からなかった」と医師に言われたという話を聞いたことがあります。どうしたことかという、昔は事故にあって助からなかった命が助かるようになってきたので、事故の数は増えても亡くなる人は減り続けてきたのではないかと思います。

その裏付けとなる資料として、例えば、交通事故における救急車の出動回数の推移と救命率の推移が分かる資料が考えられます。その資料を見れば、 のではないのでしょうか。

**問1** Bさんは、下線部(a)「つまり」以下で、どのような内容を述べることになるか。  
空欄  に当てはまる適切な内容を40字以内で書きなさい(句読点を含む)。

**問2** 空欄  でCさんはどのように発言したでしょうか。あなたが考える内容を、80字以上、100字以内で書きなさい(句読点を含む)。

国立教育政策研究所「特定の課題に関する調査(論理的な思考)」(平成24年2月実施)より一部改題  
\* 高大接続システム改革会議(第9回)配布資料の別紙3『大学入学希望者学力評価テスト(仮称)』で評価すべき能力と記述式問題イメージ例【たつき台】を基に編集部で一部改編して作成。問題イメージ〈例2〉〈例3〉は、同資料のP.8、10をそれぞれ参照

問題イメージ例から見える  
「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」で  
求められる力とその育成に必要な指導のあり方  
「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」について、文部科学省より公表された「評価すべき能力と問題イメージ例」を基に、同テストで求められる力と、それを育成するための指導のポイントを、進研模試の教科編集者の分析と現場の声から考える。

\* P.6、9、12、15、18で提示している問題イメージ例は、今後、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の問題作成に関する検討を深めていく際のたつき台として用意されたものであり、あくまでも一例に過ぎません。そのため、今回提示された問題イメージ例をそのまま「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の問題として使用することや、1回のテストで出される問題が全て今回のような形式になることを決定したものではありません。

## 複数の情報を基に推論しながら考えをまとめ、状況に応じて適切に表現する力が求められる

問題イメージ例で必要とされる力には、主に次の3つが挙げられる。

① **多様な複数のテキストを読み取る力** 文章だけでなく図表・グラフなどを読み取る力や、複数の文章を比較・分析する力。

② **論理構造を把握する力・論理的な思考力** テキストの論理構造を把握し、根拠から結論、問題点から解決法など、論理性を考える力。

③ **自分の考えを論理的に表現する力** 論理性をもって表現する力や、目的(条件)に応じた表現様式で自分の考えを表現する力。

各問題イメージ例の具体的なポイントとは、次の通り。

**問題イメージ〈例1〉多様な見方や考え方が可能な題材に関する複数の図表や文章を読み、情報を統合しながら、考えを構成し表現する問題**

「国語総合」に関連する領域・内容

より、「文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること」「現代の社会生活で必要とされている実用的な文章を読んで内容を理解し、自分の考えをもって話し合うこと」に即した問題イメージ例である。

文章だけでなく、図表・グラフを含めた多様なテキストから情報を読み取って考える必要がある。また、生徒の発言の論理構造を把握し、それに基づいて生徒が立てた仮説や論証に必要な情報など、明示されていない内容を推論し、議論に適合するようにまとめることが求められた。

このような問題に対応できるようにするために、文章に限らず、文章と関連する図表(例えば、新聞報道に使われるグラフ)など、多様な複数のテキストを用いて、それらを関連づけて考える力を身につけさせ

るとともに、根拠を論理的に考えさせ、議論などを通じて、自分の考えを言葉に出して相手に伝わるように表現する力を育むことが重要である。

**問題イメージ〈例2〉3つの文章で語られている状況、問題、解決法に関する共通点について考察し、選択式と記述式で構成・表現する問題**

「国語総合」に関連する領域・内容より、「文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること」に即した問題イメージ例。

示された3つの文章について、「状況」「問題」「解決法」の共通点を考察し、状況↓問題↓解決法の論理性を考えることを求めた「連動型複数選択+記述式」の設問である。それぞれの文章から読み取った内容について比較・分析し、論理を組み立てて説明することが求められた。

授業でも、根拠から結論、問題点から解決法など、論理性をもって考え、論理的な解答を創り出す姿勢を大切にしたい。

**問題イメージ〈例3〉1400字程**

度の新聞記事を、一定の目的に沿って読み取り、得られた情報を取捨選択したり、自分の考えを統合したりしながら、新たな考えにまとめ、200〜300字で表現する問題

「国語総合」に関連する領域・内容より、「論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること」「文字、音声、画像などのメディアによって表現された情報を、課題に応じて読み取り、取捨選択してまとめること」などに即した問題イメージ例である。

公立図書館について書かれた新聞記事を読み、今後の公立図書館のありべき姿についての自分の考えを、3つの条件に従って表現することを求めた設問だ。読み取った情報を整理した上で、それに基づいて自分の考えを論理的に(思考プロセスを明らかにしながら)表現する必要がある。また、与えられた条件に即して、文章構成を考えながら記述することも求められた。普段から、目的(条件)に応じた表現様式で自分の考えを表現することを意識させたい。

## 「質問力」の育成が アクティブ・ラーニングを活性化させる

北海道札幌旭丘高校 細田季男



ほそだ・ときお  
教職歴30年。同校に赴任して13年目。

### 図表やグラフを使って 批判的思考力を高める

問題イメージ例の特徴は、文章や図表、グラフといった複数の情報から考えを構成していく点にあります。この問題が取り上げられたのは、仮説を立てて検証する力、論証のプロセスや論理を導き出す過程を見るためでしょう。国語の授業でも、ベン図やマトリックス、ピラミッドなど、複数の情報を使って説明させたり考えさせたりする指導が、これまで以上に求められると考えます。

図表やグラフの活用は、批判的思考力を養う上でも大切です。授業では、問題イメージ例のように、単に

与えられた情報を読み取らせるだけではなく、様々な解釈できるデータを使うと、学びが深まると思います。どこかに錯誤があるデータ、多様な見方ができるグラフをあえて選び、生徒に批判させたり、別のデータを使って反証させたりすることで、生徒はデータをうのみにすることの危うさ、解析の楽しさを実感するでしょう。

問題イメージ例の例2と例3は、本文がないため分析が難しいのですが、例2は、一見、ばらばらに見える複数の情報から共通の問題点を抽出して、その解決策を考える力を見るのがねらいだと考えられます。例3は、情報を取捨選択しながら自分の考えをまとめる力を見る問題ですが、個別学力検査の小論文を採点しやすくした問題という印象を受けました。これらの問題には否定的な意見もあるようですが、複数の情報を編集する力の土台は国語科に置く

いう方針は伝わってきますし、その必要性もよく分かるので、もっと評価してもよいと思っています。

### 活動をファシリテートするため 生徒把握がより重要に

複数の情報を用いて説明する力や批判的思考力などは、アクティブ・ラーニング（以下、AL）によって鍛えられると思いますが、ALを取り入れた授業は、うまくできればこれほど楽しい授業はありません。講義形式の授業では、「今日はよい授業だった」と思っているのは教師だけということもありますが、ALでは、生徒の様子を見れば、授業の理解度や満足度がよく分かります。

ALで最も大切なのは、生徒の質問力を高めることでしょう。質問力は、一般的にはあまり重視されていないようですが、言語活動の根幹を成すと言ってもよいと思います。議論の身を理解していないまま活動を進めても、表面的な活動に終わってしまふからです。しかし、生徒は、むやみに質問してはいけないと思ひ込む傾向にありますし、そもそも自分が何が分からないのかを把握でき

ていないこともよくあります。そこで、受け取った情報を語らせてみる、詳しく言い換えさせるといった手順を踏み、生徒に分からない箇所を自覚させることが必要でしょう。

ALでは、教師のファシリテートも重要です。最初に有効な問いかけがなければ、生徒は動機づけの段階でつまずき、目的も分からないまま授業に参加することになり、活動は低調なものになってしまいます。

適切な発問や声かけを行うためには、活動に至るまでに生徒は何ができていて、何ができていないのか、何を知っていて、何を知らないのかということを知り、教師が十分把握しておかなければなりません。生徒の学習歴を把握し、「最近習ったこれと関係あるのでは？」と投げかければ、生徒は自然と身を乗り出してきます。生徒が話したいと思う状態さえつくれば、その後は最低限のファシリテートで活発な活動になります。

今後の指導では、これまで以上に、生徒の興味・関心を喚起する教材の選別や提示の仕方が重要であり、そのためにしっかり生徒把握を行うことが求められると考えます。

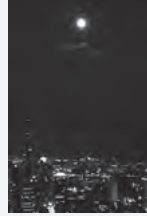
問題イメージ〈例4〉

事象から問題解決に必要な情報や条件を抽出・収集したり、仮定をおいて考えたりする問題。

# 数学

次の問いに答えよ。

伊藤さんは、「スーパームーン」に関する記事を読み、月が地球から最も離れたときに見える満月と比べて、記事にあるような「スーパームーン」はどのくらい大きく見えるのを知りたくなり、月の見かけ上の大きさについて調べた。



夜空に浮かぶ大きな満月「スーパームーン」

月が地球に最も近づくタイミングと満月のタイミングが重なるため、月が通常より大きく見える。

(平成27年(2015年)9月28日 記事)

〈伊藤さんの調べたこと〉

- 月の見かけ上の大きさは、見えている月を円と考えると、その直径の両端と視点とを結ぶ二等辺三角形の頂角である「視直径」で表す。
- 「スーパームーン」の視直径はおよそ 33 分 (ふん)、月が地球から最も離れたときの満月の視直径はおよそ 29 分である。ただし、1分は  $1^\circ$  の  $\frac{1}{60}$  である。

(1) 伊藤さんは、次の方法で満月を観測し、フィルムに円を描いて比べてみることにした。

〈伊藤さんの方法〉

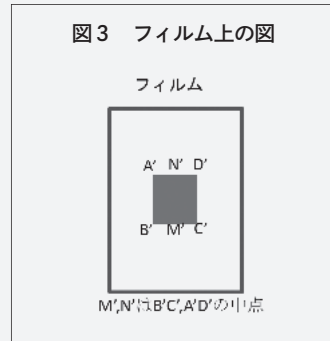
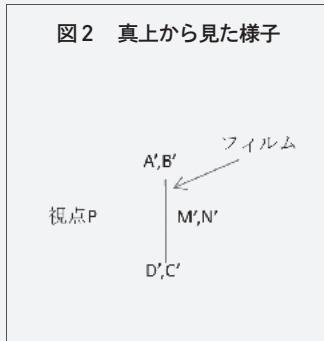
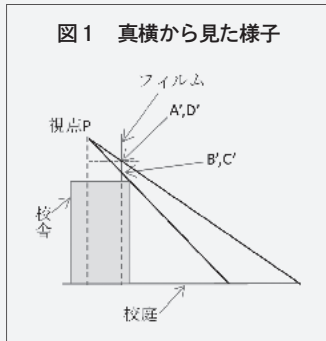
視点から月の中心に向かって 500mmの位置に、月の中心と視点とを結ぶ直線に対して垂直になるように透明なフィルムを置く。そして、このフィルムを通して見える月をフィルムに写し取る。

伊藤さんの方法でフィルムに写し取られる、視直径  $\theta$  分 (ふん) の月の直径は何mmになるか。この直径を求める式を三角比を用いて答えなさい。

(1) の伊藤さんの方法は、校庭に文字や形を描くときにも応用できる。今、学校の屋上から校庭に描かれた四角形を見ている。下の図1、図2のように、伊藤さんの視点Pに対し、校庭を一つの平面と考えた上で、この平面に垂直になるように透明なフィルムを置く。このフィルムを通して校庭を見ながら、校庭に描かれた四角形 ABCD を写し取ることとした。ただし、視点Pは、線分  $B'C'$  の中点  $M'$  と、線分  $A'D'$  の中点  $N'$  を含むフィルムに垂直な平面上にあるものとする。

(2) このとき、写し取られた四角形  $A'B'C'D'$  (図3) が正方形になる場合、校庭に描かれた図形は、 $AD > BC$  の等脚台形であるといえる。

上の下線部の事柄が言えることの理由を説明しなさい。



(3) 校庭に描かれた四角形 ABCD における2辺の AD と BC の比はどのような式で表されるか。校庭から視点Pまでの高さを  $h$ 、フィルム上の正方形  $A'B'C'D'$  の辺の長さを  $d$ 、校庭から点  $B'$  までの高さを  $g$  として、 $h, d, g$  を用いた式で示せ。

\*高大接続システム改革会議(第9回)配布資料の別紙3『大学入学希望者学力評価テスト(仮称)』で評価すべき能力と記述式問題イメージ例【たつき台】を基に編集部で一部改編して作成

## 問題文や図形から必要な情報を読み取り、知識や技能を用いて表現する力が求められる

数学の問題イメージ例は、「事象から問題解決に必要な情報や条件を抽出・収集したり、仮定を置いて考えたりする問題」として出題されている。平面幾何、三角比の知識を活用して日常的なこと（測量）を行う問題であり、(1)は、題材として近年話題のスーパームーンを取り上げている。(2)は、事実を挙げた上でその理由を答えさせるという問題で、問い方が目新しい。(3)は、(2)で考察した図形とは別の視点から、生徒自身で図形を設定し、考察を行う必要がある。

### ◎問題文・図形等の事象やその数学的表現から情報を読み取る

(1)は、「スーパームーン」に関する事象から、月の大きさを調べるために、フィルムに写った月の直径を三角比の性質を使って調べる問題であり、問題解決に必要な情報を正しく抽出した上で、問いに答える必要がある。

この問題では、「視直径」という見慣れない用語について、前後の文脈からこの用語がどのような意味を持つものなのかを把握するなど、問題で設定されている状況を正確に分析する力が求められた。

また、問題に図は与えられてはいませんが、実際に自分の手で図を描いてみなければイメージしにくい。具体的に書き出してみたり、実験したりすることによって、題意を把握する、もしくは推測する力が求められている。

### ◎数量化・図形化・記号化などをし、数学的に表現する

(2)は、(1)を応用して、フィルムに写った図形（正方形）から校庭に描かれた図形を等脚台形と予想して、その理由を説明させる問題であった。理由を説明させる点が特徴的であり、図形のイメージをつかんで、等脚台形になることを、三角比や図形の性質を用いて論理的に説明する

必要がある。

言葉だけでもある程度の説明はできるかもしれないが、言葉に加えて数学的表現（三角比で表す）を用いると、より正確で簡潔な説明となる。同様に、図を用いて視覚的に分かりやすくすることなど、数学的表現を用いて論理的に説明する力が求められた。

(3)は、(2)で予想した等脚台形について、校庭から視点までの高さや、フィルム上の正方形の辺の長さなどを文字で表し、その文字を用いて等脚台形の辺の比を表す問題であった。(2)で考察したことを、「数量化・図形化・記号化などをして数学的に表現」する力が求められた。問題を解くためには、必要な辺の長さを自分で設定し、平行線の性質を上手に利用して、求める辺の比を文字で表す必要がある。

ただし、(2)とは異なり、図が与えられていないため、(2)で与えられた図を基にして、より状況が把握しやすい図を描けるかどうかのポイントであった。

### ◎数学の知識や技能を活用し論理的に考察・処理して結果を得る

問題イメージ例の(1)～(3)を通して、知識としては「数学I」の「図形と計量」と、中学校段階までの幾何の知識があれば解答できるが、問題文に与えられた条件を図式化して、論理的に結論を導く力が求められた。

今後の指導においては、単に知識（公式や解き方）を教えるだけでなく、公式の意味や成り立ち、その分野を学ぶ意義（日常生活でのその知識の活用場面や数学史的な背景）、様々な考え方（別解）といった数学の有用性と柔軟な思考力を育成する必要がある。

今回の問題イメージ例で扱われたような「月の見かけ上の大きさ」「学校の屋上から見た図形」の問題について、高校で学習する数学の知識を適用するためには、これまでよりも思考の多様性を育み、相手に伝わるように筋道をしっかり立てて表現する力を育成していく必要がある。授業の中では、分野を超えて身近な問題を数学的に考察する機会や、クラスメートに自分の考えを説明する場面を設けることなどが求められるだろう。

## 日常的な事象と数学的思考とを結びつけられる力を育成したい

北海道札幌清田高校 角 智幸



かど・ともゆき  
教職歴20年。同校に赴任して2年目。

### 異なる単元の知識を関連づける力が必要

今回公表された問題イメージ例は、問題自体はよく練られた良問ですが、難易度は非常に高く、指導の際にはいくつか注意が必要です。その1つは、教科書に出てこない単位の扱いです。設問に定義が書いてあるので、60分を1に変換できるかどうか、解答への分かれ目になると思います。また、三角比の平面・空間図形への応用も、注意が必要です。授業では、縦から見た図、横から見た図など、様々な図を用い、切り口や見る方向

の違いについて説明し、空間図形をきちんと認識させた方がよいでしょう。

難易度について課題はあるものの、問われている力は非常に重要です。問題イメージ例から読み取れるメッセージの1つは、知識を融合して課題を解決する力を身につけさせたいということ。例えば、「三角比を平面図形や空間図形の考察に活用する力」に加えて、中学校で学んだ「相似」の知識を思い出せるかどうかポイントになります。異なる単元の知識を組み合わせた融合問題に対処できる力が、重要になるでしょう。

もう1つのメッセージは、日常生活の体験や実感と結びつける重要性です。問題に示された現象は、教室のプロジェクトに写した正方形が歪んで見えるのと同じ原理で、こうした日常的な事象と結びつけられる

かどうかポイントとなります。

私の授業でも、実社会とのつながりをイメージさせることを心がけています。「数学I」の「データの分析」であれば、企業でのデータの活用方法を交えて説明しています。例えば、靴屋で小さいサイズばかり余った場合、その原因は、データをしっかりと取らず販売予測を誤ったことが考えられます。きちんとデータを取り分析していれば、余剰在庫を減らして社員の給与を増やせるかもしれません。

生徒に「数学を一生懸命に学習することで人々を幸せにすることもできる」と伝えれば、授業の取り組み方も変わるのではないのでしょうか。

### 計算力も表現力の1つ基礎・基本の徹底を

学力の要素として、知識・技能に加えて思考力・判断力・表現力の育成が重視されています。それらは、一見、新しい力のように見えますが、数学では次のように考えることができます。問題の意味を自分なりに把握する力が思考力、その問題を解決

するためにどの単元の知識を使うべきかを選ぶ力が判断力、問題を解決するために場合分けしたり、解答を記述したりする力が表現力です。

また、計算力も、表現力の手段の1つだと、私は考えます。計算が得意な生徒は、先を見越す力があると言われています。この式は、この先どうなるのかという見通しを立てて問題に取り組めるため、途中でつまづくことはほとんどありません。

一方で、基礎・基本としての「計算力の向上」は、引き続き重視する必要があります。今は、数学が得意な生徒でも、単純な計算ミスをするといえます。発展問題に取り組む前に、基礎・基本の定着の徹底が何より大事です。計算が苦手な生徒は、式を立てても最後まで解けず、その結果、数学が嫌いになり、数字を見るのも嫌になってしまうのです。

1人で沈黙考し、計算と格闘する経験を積むことで、表現の場としてのアクティブ・ラーニングがより深い思考の場となり、生徒の数学活動がより主体的になると思います。

## 社会的なテーマについて自らの考えや意見を、 論理的に英語で表現する問題。

# 英語

～ Speaking ～（主な受験者層として **CEFR レベル A1 ～ B1** 【※】 を想定）

与えられた社会的なトピックに対して、個人の考えや経験に基づいて意見を述べる

英語力調査事業では面接形式で実施したが、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」における実施形式（面接／C B T等）については検討中

### 【問題】

Here is a statement:

Students in Japan should travel abroad. Do you agree or disagree with this statement?  
Give one or more reasons why you think so.

You will have one minute to prepare. Then, you will have two minutes to speak.

<60 seconds>

### 【解答例】（評価3となる解答例）

(Affirmative)

I agree with the statement. Students (in Japan) should travel abroad because traveling is one way to learn. By visiting new places, it is possible to learn about things such as the food eaten there or the language spoken there. Going abroad is the best way to study.

(Negative)

I disagree with this statement. Students (in Japan) do not need to travel abroad. These days it is easy to get information about foreign countries on the internet or television. There are a lot of programs and videos made by people who travel all over the world, so it is not important to go there yourself.

平成26年度 英語教育改善のための英語力調査事業 報告書 P.84 より

### 高等学校学習指導要領「コミュニケーション英語Ⅰ」に関連する領域・内容

- 「コミュニケーション英語Ⅰ」2. 内容（1）
  - ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。
- 「コミュニケーション英語Ⅰ」2. 内容（2）
  - ア リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたり話したりすること。
  - ウ 事実と意見などを区別して、理解したり伝えたりすること。

※高大接続システム改革会議（第9回）配布資料の別紙3『大学入学希望者学力評価テスト（仮称）』で評価すべき能力と記述式問題イメージ例【たたき台】を基に編集部で一部改編して作成。参考資料～Writing～は、同資料のP.21を参照

「聞く」「読む」を通して得た知識を活用し、「話す」「書く」の発信力がますます必要に

【ライティング】社会的なテーマについて、個人の経験などを基に、自分の意見と理由を論理的に書いて述べる

ライティングでは、「コミュニケーション英語Ⅰ」の内容より、「聞いたことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く」や「事実と意見などを区別して、理解したり伝えたりすること」などに即した参考資料問題となっている。

ショートエッセイ・スタイルの意見文を書くタスクに対しては、自分の意見と、その根拠となる事例や説明を論旨のねじれなくまとめることが大切である。その上で、解答例に見られるように、要素ごとに段落分けをしたり、相互のつながりを示す discourse markers を使用したりすることもポイントとなる。

採点基準には、内容に関する採点の観点として、「意見（＝課題に対する自分の意見や立場を伝えることができる）」「理由（＝自分の意見や立場をサポートする理由や具体例などを伝えることができる）」「2つと、表現における採点の観点として、「語彙」「文法」「構成」の3つがあり、合わせて5つの観点から評価が行われる。

内容面の採点は、それぞれ必要な要素を満たしているか否かの2段階の判定である一方、表現面の採点においては、0～4の各5段階での判定となっている。

解答時間は20分と決して長くはない。イラストを参考に、書くべきアイデアを素早く決めて書き始め、最後に読み直して推敲する時間の余裕がほしいところだ。

【スピーキング】与えられた社会的

なトピックに対して、個人の考えや経験に基づいて意見を述べる

スピーキングの参考資料問題も、「コミュニケーション英語Ⅰ」の内容より、「聞いたことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする」や「事実と意見などを区別して、理解したり伝えたりすること」などに即した内容だ。与えられたテーマに対して話す内容を考える時間が1分で、解答時間は2分となる。最初に自分の意見と、そう考える理由を明確にした上で、時間内に理由の具体例を挙げるなどして説明を肉づけしていく。

最初の意見との論旨のねじれが生じないこと、解答中に不自然なポーズを何度もはさまないことがポイントとなる。

採点基準では、次の2つが採点の観点に設定されている。1つは「内容構成の評価」、もう1つは「文法、表現の評価」であり、それぞれ0～3点の全4段階刻みとなっている。最初の意見との論旨のねじれが生じた

解答であれば、「内容構成の評価」において、0点に相当する「与えられた質問に対応した内容になっていない、あるいは内容が量的にほとんどないか断片的である」と見なされるだろう。

また、ポーズを何度もはさんだ解答の場合、各ポーズが数秒程度であれば、3点満点の「自分の言葉で十数語以上は話して、適切な文法や表現を用いている。誤りがあっても理解には影響しない」と判定される可能性は高いと考えられる。ただし、聞き手にとって不自然に長いと感じられるような数十秒に及ぶポーズが繰り返された場合、文法や表現にさしたる誤りはなくとも減点対象となり、2点止まり、あるいは、それ以下と判定されることがあるかもしれない。

解答し始める前の考える時間内に考えがまとまりきらなかった場合は、多少、解答時間内での話し始めが遅れてもよい。早口になることなく落ち着いて、言葉を選びつつも、しっかりペースを保ったまま、自分の考えを伝えきるようにするとよいだろう。



## カリキュラム・マネジメントの観点から 英語を学校活動全体の中に位置づける

熊本県・私立真和中学・高校 松下勝之



まつした・かつゆき  
教職歴35年。同校に赴任して6年目。

### 実践的な運用場面を 教科を超えてつくる

経済協力開発機構（OECD）による2003年、06年の「生徒の学習到達度調査（PISSA）」では、日本は読解力、数学的リテラシーなどの分野で大きく順位を下げました。この「PISSAシヨック」が現在の教育改革の背景の1つにある以上、大学入試改革においても、「思考力・判断力・表現力」の育成を重視するという方向性は当然です。ですから、今回の参考資料問題に対しても、私は違和感を抱くことはありませんでしたし、生徒の思考力、創造性を見る問題を目指していると評価してい

ます。

それまでの英語の指導が「思考力・判断力・表現力」をないがしろにしてきたとは、私は思っています。ただ、これからの指導は、今までの指導で潜在化することがあった「思考力・判断力・表現力」を、より顕在化させた教え方、評価の仕方が求められているのだと考えています。

実際に、英語を使ってコミュニケーションを取る場面を想定すると、英語4技能のうち、どれか1つでも技能が欠けていては成り立ちません。実践的な運用場面を考えると、英語4技能を統合せざるを得ないと言ってもよいでしょう。

こうした中で、今後の英語指導でまず重要になるのは、カリキュラムの中に実践的な運用場面を具体的にどう組み込んでいくかだと、私は思います。英語の授業に限らず、例えば、「総合的な学習の時間」や学校設定教

科・科目を使って課題解決型の授業を設定し、英語でプロジェクトについて発表するのもその1つでしょう。教科の枠内だけではなく、学校全体の活動の中に英語をどう位置づけるのかといった、カリキュラム・マネジメントの観点がまずは必要です。

### 「運用」と「知識」を つなぐ文法学習

その上で、もう1つ重要なのが、「文法」の扱いです。「文法」は、英語の実践的な運用と通常の授業を連携させる際の鍵になります。

文法では、インプットした知識を定着させるために、様々なアウトプット活動をうまく取り入れたいところです。例えば、50語びったりで英文ミニ・エッセイを書くコンテスト「[Extremely Short Story Competition]」が私が注目している活動の1つです。また、「総合的な学習の時間」や学校設定教科・科目のテーマと連携して、「仮定法を必ず1か所は使い、50語で○○のテーマについて書こう」などといった活動も考えられるでしょう。自分が書いた英文を校正、添削することで、実践的な運用能力が強化さ

れます。

私は、これからの英語教師に求められるのは、ファシリテーション力だと思います。「英語でもっとコミュニケーションしよう」「もっと深く考えたい」と生徒のモチベーションを高めるような授業を実現するには、Parliamentary Debate（即興的に行われるディベート。入念な事前準備を必要としないタイプ）などを取り入れ、学習内容を深めさせたり、ほかの生徒との協働を楽しんだりすることが大切になります。つまり、教え込むだけでなく、生徒一人ひとりの主体的な学びを促進させる仕かけが、授業でより必要になるわけです。

そうしたファシリテーターとしての仕かけは、英語や「総合的な学習の時間」はもちろん、全ての教科・科目で活用することができます。「思考力・判断力・表現力」を育むために、英語という教科が「学びのツール」として全教科とつながることが理想です。そうしたカリキュラムが自校に組み上がった時、きっと生徒にも、様々な言語、文化、価値観の人たちと協働するファシリテーション・マインドが身につくのだと思います。

問題イメージ〈例1〉

与えられたデータから考察に必要な情報を抽出し、  
グラフの作成を通して関係を見いだす問題。

# 物理

二人はさらに探究を続けることにした。

カズエ：この日射量計を使って、何とかして太陽定数の大きさを求めることはできないかな？

ヒロシ：いろいろな太陽高度のときに日射量計を太陽に向けて直達日射量を測定し、グラフを描いて考えてみたらどうだろう。下のような図を使って説明すると、太陽高度が $\theta$ のとき、太陽光が大気中を通過した距離は、大気の厚さを1とすると、 $1/\sin \theta$ となるね。ここでは、仮に、太陽光のエネルギーは大気を通過した距離に比例して減衰するとして考えてみよう。

図4 ヒロシさんが使った説明図

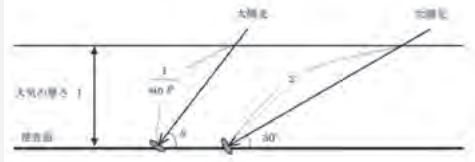


表1 測定から得られたデータ

※時刻	※太陽高度 $\theta$	$1/\sin \theta$	気温	直達日射量 単位: $\text{kW}/\text{m}^2$
12:20	$69^\circ$	1.07	$21.5^\circ\text{C}$	0.92
13:57	$58^\circ$	1.18	$23.0^\circ\text{C}$	0.89
14:30	$52^\circ$	1.27	$23.0^\circ\text{C}$	0.87
15:02	$46^\circ$	1.39	$22.5^\circ\text{C}$	0.84

※時刻と太陽高度 $\theta$ は、日射量計で水温の変化を読み取った4分間の中央値を示す。

二人は、快晴の日に、いろいろな太陽高度で直達日射量を測定し、得られたデータを表1にまとめた。そして、このデータからグラフを作成して太陽定数を推定することにした。

問5 表1から必要なデータを抽出してグラフを作成し、ヒロシさんが考えたような仮定に基づいて推定される太陽定数を有効数字2桁で表すとき、次式の $\square 12 \sim \square 14$ の中に入る数字として最も適当なものを、下の①～⑬のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

推定される太陽定数 =  $\square 12 \cdot \square 13 \times 10^{\square 14} \text{ kW}/\text{m}^2$

- ① 1 ② 2 ③ 3 ④ 4 ⑤ 5 ⑥ 6 ⑦ 7 ⑧ 8 ⑨ 9 ⑩ 0 ⑪ -1 ⑫ -2 ⑬ -3

問題イメージ〈例2〉

温度や浮きの状態など、問題文で与えられた状況からガリレオ温度計の仕組みを思考する問題。

A高校の理科部は、文化祭のブースで、図1に示すようなタイプの温度計を展示することになった。この温度計は、次のような仕組みとなっている。ガラス円筒の液体中に、ガラス製の密封された質量の異なるいくつかの浮きが入れている。温度変化に伴って、それらの浮きが浮いたり沈んだりすることによって、大まかな温度を示す。なお、この商品の品質表示ラベルには図2のように記載されている。

図1 実験ブースに展示する温度計

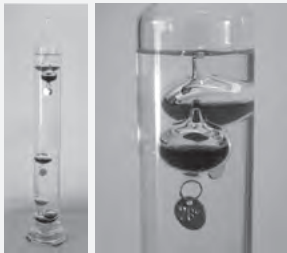


図2 この温度計に付いていた品質表示ラベル

〈品質表示〉  
円筒内の液体：パラフィンオイル  
ガラス球内の液体：メタノール  
(アルカリ性色素入り)  
タグプレート・リング：真鍮(しんちゅう)

図3 ヒロシさんが作成したパネル

温度計の解説  
温度が高くなると、浮きのガラス球の体積変化によって、浮きにはたらく浮力が変化します。しかし、パラフィンオイルの体積膨張率はガラスの体積膨張率の(A)倍なので、ガラス球の体積変化が浮き沈みに及ぼす効果は、液体の密度変化による効果と比べるときわめて小さいといえます。  
温度が高くなると、(イ)。その結果、(ウ)。その結果、(エ)。よって、浮きは下に沈みやすくなります。

理科部のヒロシさんは、温度変化によって浮きが上下に移動するしくみを解説するため、図3に示すようなパネルを作成した。

問2 上の説明文の(イ)～(エ)に入れるべき文章として最も適当なものを、下の文章①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(イ)  $\square 4$  (ウ)  $\square 5$  (エ)  $\square 6$

- 文章：①浮きにはたらく重力のほうが浮力よりも大きくなります  
②浮きにはたらく浮力のほうが重力よりも大きくなります  
③浮きにはたらく重力が大きくなります  
④浮きにはたらく重力が小さくなります

- ⑤円筒中の液体の密度が大きくなります  
⑥円筒中の液体の密度が小さくなります  
⑦浮きにはたらく浮力が大きくなります  
⑧浮きにはたらく浮力が小さくなります

\*高大接続システム改革会議(第11回)配布資料の資料3-2『大学入学希望者学力評価テスト(仮称)』で評価すべき能力とマークシート式の問題イメージ例【たつき台】を基に編集部で一部改編して作成。問題イメージ〈例1〉の問1～4は、同資料のP.11～14を参照、問題イメージ〈例2〉の問1、問3は、同資料のそれぞれP.20、21を参照

## 必要なデータを抽出して関係を見いだす力や 仮説を立てる力が求められる

### 【例1 第1問 問5】

第1問の問5は、表1のデータを用いて推定される太陽定数を求める問題だ。問4に出された太陽定数の定義と、問題文の2人の会話から、 $1/\sin\theta$ がゼロの時の直達日射量が推定される太陽定数であることを見抜く必要がある。「評価すべき具体的な能力(案)」の「与えられた状況の中から、必要なデータや条件を抽出・収集する力」「仮説を立てる力」が問われている。特に、「与えられた状況の中から、必要なデータや条件を抽出・収集する力」を見る問題は、第1問の問5だけでなく、今回の問題イメージ例全体に見られたことから、実際のテストでも出題されると予想される。

太陽定数の推定方法を見極めた後は、 $1/\sin\theta$ と直達日射量の値を与えられたグラフ用紙にプロットし、2つの関係を見いだす必要がある。このグラフ用紙に軸や目盛りが

ないことから、どのようなグラフを描くかは自分で判断しなければならぬ。既存の問題とは異なる観点の「どのようなグラフを描くかを自分で判断し、作成したグラフを外挿して正解を読み取る」が扱われた問題であり、また、観察・実験を通じた探究活動が意識された問題とも言える。

この問題は、グラフを利用した解答が求められているが、問題文から、 $1/\sin\theta$ と直達日射量の関係を1次関数と考え、直達日射量と $1/\sin\theta$ の関係式を立式して $1/\sin\theta$ にゼロを代入すれば、グラフを作成せずに解答することも可能だ。このように、解答を推定するプロセスについて様々な方法を考察することとは、「仮説を確かめるための方法立案し実践する力」の育成につながると考える。

第1問を通して、太陽定数や直達日射量、日射量計など、物理では見慣れない用語や実験器具が多く扱わ

れ、また、太陽電池や電気自動車のような社会と関連の深いテーマが出題された。実際のテストでも、物理に関連する多様なテーマが出題されると予想される。日常生活や社会で見られる科学・技術、そして他の教科・科目への興味・関心を高めておくことが大切だ。

### 【例2 第2問 問2】

第2問の問2は、温度や浮きの状態など、問題文で与えられた状況からガリレオ温度計の仕組みを思考し、その仕組みを正しく説明した文章を選択する問題だ。「温度計の仕組みを分かりやすく解説したパネルの作成」が出題のテーマとなっており、観察・実験を通じた探究活動が意識された問題と言える。

解答するためには、まず、説明文の「温度が高くなると」から、温度が高くなった場合に、重力・浮力・密度がどのように変化するか、仮説を立てながら、それらの関係性を見極める必要があった。温度が高くなると円筒中の液体の密度が小さくなること、浮きにはたらく重力や浮力に温度は直接影響しないことに気づけるかがポイントである。

次に、液体の密度が小さくなった場合の、浮きにはたらく重力や浮力の変化を思考することが求められた。アルキメデスの原理を理解していれば、浮力が小さくなることは容易に想像できる問題であり、物理法則や原理に基づいて思考することが重視されていると思われる。最後に、浮力が小さくなることと、説明文の「浮きは下に沈みやすくなります」から、重力と浮力の大小関係を思考することが求められた。

このように、今回の問題イメージ例では、「温度が高くなると、円筒中の液体の密度が小さくなる」「液体の密度が小さくなると、浮きにはたらく浮力が小さくなる」といった仮説を立て、その仮説が正しいかを原理に基づいて思考するステップが複数扱われていた。ほかにも、仮説を立てる力を見る問題として、観察された現象や測定データを用いて、論理的に組み立てられている仮説を選択する問題などの出題も考えられる。観察・実験を通じた探究活動において、与えられた状況の中から必要な情報を抽出・収集し、仮説を立てる力を養うことが、より重要になるだろう。

汎用性のある手法を用いる実験を選んで行い  
探究活動で身につく力を効率的に育む

大阪大学 全学教育推進機構高大接続オフィス 特任教授 川内 正



かわうち・ただし  
大阪教育大学附属高校  
平野校舎、四天王寺高  
校などに勤務。大阪府  
高等学校理化教育研究  
会顧問。

実際の実験を通して  
身につく力が求められる

問題イメージ例で最も注目すべき点は、例1、例2ともに実験が題材となっていてことです。これまでもそうした入試問題は数多く出題されていますが、実際に実験をしていなくても、理論を知っていれば解けるような問題がほとんどでした。しかし、今回の問題イメージ例は、実験の処理に沿った内容であり、生徒が自分で手を動かして実験をした経験がないと、分かりにくい問題になっています。例えば、例1の手順Ⅱに「太陽光

が容器の断面に対して常に垂直に当たる」とあることも、どうすれば実現するのか、意外と分からないと思います。自分で装置をセットしてこそ、理解できることがあります。また、

例2では、与えられた表から使うデータを抽出し、線膨張率との違いにも留意して体積膨張率を比べますが、これは実験で実際に使う手法です。

「評価すべき具体的な能力(案)」に、知識・技能・思考力・判断力に加え、探究活動を想定した7つの力が示され、そのうち4つの力が問題イメージ例の2例に共通して測れるように問題が作られています。そのことから実験の重要性がうかがえますし、私は、「理科課題研究」をテストにしたような問題だと感じました。

既存の問題と異なる点では、与えられた条件から必要な情報を選んで

答えるようになっていことに注意が必要です。解答に必要な条件しか問題文に書かれていなかったこれまでのとは、大きく違います。また、例1は地学に関連する問題でした。実験を題材とした問題が中心になるとすれば、物理学の応用学問である地学関連の問題が多くなると推測します。

生徒同士の議論によって  
仮説を立てる力を鍛える

問題イメージ例を見る限り、実験の重要性は高まっています。演示実験をしても、生徒が実際に行う実験が必要です。演示実験は理論理解を助けるために行うものであり、生徒が行う実験とは目的が異なるからです。もちろん、全ての理科の教科書にある全ての実験を行うことはできませんから、ほかの実験にも応用できるような手法を用いる実験を選んで行い、授業で適宜、知識を補足するのが現実的だと思います。

実験で得たデータから必要な情報を抽出し、結論を導く過程では、計算力も鍛えられます。例1の間3で

は「cm」を「m」に換算して解答しますし、例2の間1では負の指数を含む計算をしなければなりません。そうした一連の計算は、普段から実験を行い、得た数値のデータ処理をすることで慣れていきます。また、例1の間5ではグラフ用紙に目盛りや軸が示されておらず、自分で描くグラフを判断する力が必要です。そうした力も、実験を行い、得られた結果をグラフ化するという作業を積み重ねていくことで身につけていきます。

今回の2つの問題イメージ例からは、「仮説を立てる力」の重要性がうかがえます。生徒に問いを投げかけ、生徒から出てきた仮説をグループで議論させて、1つの仮説にまとめる。いわゆるアクティブ・ラーニングを積み重ねて、仮説を立てる考え方を鍛えていく必要があるでしょう。

現行の教育課程では物理の学習内容が増え、厳しいとは思いますが、授業内容を工夫して、実験やアクティブ・ラーニングを行う時間を確保していくべきだと考えます。

問題イメージ〈例3〉

歴史資料を読み解き、複数の歴史事象を関連づけながら、  
多面的・多角的に考察して仮説を設定し、  
論拠に基づいてその適否を判断する問題。

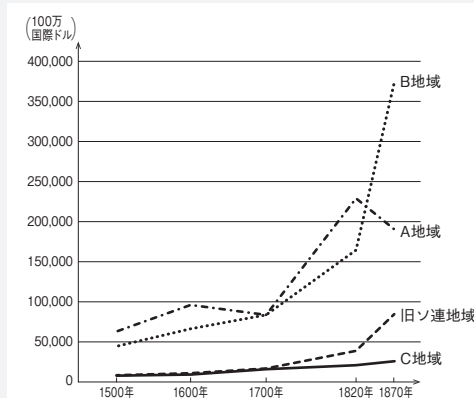
# 世界史

## 第1問

次の図は、『経済統計で見る世界経済 2000 年史』（アンガス・マディソン著）に掲載されている数値をグラフ化したものである。日本・中国・西欧・旧ソ連連邦（旧ソ連）にあたる各地域の経済規模（GDP）の長期的な傾向を把握するために、16 世紀までさかのぼって推計している。グラフと注を読んだうえで、I、II の問いに答えよ。

注1 「西欧」、「旧ソ連」というまとめ方は、マディソンの著書によっている。

注2 GDP 数値は、主として一人あたり産出額に人口規模を掛け合わせて算出した概算値を用いている。また、国際ドルとは、異なる通貨単位を計量するために使われる単位である。



I 16 世紀に4 地域中で最大の経済規模をもっていたA 地域のGDPは、17 世紀の落ち込みののち、18 世紀に増加している。それらの背景となる政治・経済・社会の動きについて、下の問いに答えよ。

問1 次の①～⑧のうち、A 地域の変動について述べた文として適切なものをすべて選べ。

- ① 16 世紀にはこの地域の人々がアメリカ大陸を含む世界各地に進出し、世界の貿易・商業を活性化させた。
- ② 16 世紀には日本やシベリアなどの銀が大量に流入して経済が活性化したが、遊牧民や海賊の侵攻に苦しんだ。
- ③ 17 世紀には大規模な農民反乱や、東北から侵攻した異民族王朝への抵抗戦争などによって、人口が減少したと考えられる。
- ④ 17 世紀には、宗教対立や王位継承紛争もからんで各地で不況や戦乱・社会的迫害が生じた。その背景には地球の寒冷化もあった。
- ⑤ 18 世紀には急激な人口増に農業集約化や商工業の発展が追いつかず、辺境部の開発や海外への移民が活発化した。
- ⑥ 18 世紀には租税が銀納化される一方、人頭税が廃止され、経済成長にもつながった。
- ⑦ 18 世紀には輸出が低迷するが、その一方で国内の商業・手工業が発展し輸入品の国産化にも成功したので、全体として外国貿易に依存しない経済の仕組みが成立した。
- ⑧ 18 世紀には農業技術が向上して大規模な農業生産・経営が可能になったため、競争に敗れ土地を失った農民は都市に流入して、工場労働者となった。

II グラフ中の「旧ソ連地域」を示す折れ線に関する次の会話文を読んで、下の問いに答えよ。

(教員) 旧ソ連地域のGDPは18世紀には上昇傾向を示していますね。この理由は何だと思いますか。皆さんで仮説を立てて話し合ってみましょう。

(生徒1) 18世紀に中央アジアや極東でロシア帝国がどんどん勢力を拡大していたことと、関係あるのでしょうか。

(生徒2) いや、ロシア帝国も工業化が進んだのではないかな。北方戦争に勝ったことは、軍事力が向上したことの一つの証しとも言えますよね。

(生徒3) 18世紀にイギリス以外の国で工業化が進んだというのをおかしいと思います。

(生徒4) 私は、穀倉地帯をもつウクライナやポーランドなどを占領したことが影響していると思います。当時のロシアは農産物輸出で富を築いたのではないのでしょうか。

問4 生徒2が自分の仮説を統計データを用いて裏付けようとした場合、明らかに役に立たないと思われるものはどれか。次の

- ①～⑤のうちからすべて選べ。
- ① 18 世紀ロシアの品目別輸出額の変動
- ② 18 世紀ロシアの産業別人口の変動
- ③ 18 世紀ロシアの地域別農奴数の変動
- ④ 18 世紀ロシアの年次別戦死者数の変動
- ⑤ 18 世紀ロシアの職業別納税者と納税額の変動

\*高大接続システム改革会議(第11回)配布資料の資料3-2『大学入学希望者学力評価テスト(仮称)』で評価すべき能力とマークシート式の問題イメージ例【たつき台】を基に編集部で一部改編して作成。問題イメージ〈例3〉の問2、問3は、同資料のP.30、31をそれぞれ参照

## 資料の活用を通じ、歴史事象について論理的に捉える力が求められる

◎歴史に関する重要情報を資料から取り出し、考察する力

問1は、GDPの長期変動を示したグラフを基に、複数地域におけるグラフの変化の背景を考える問題だ。各折れ線グラフの該当地域は1つを除き明らかにされておらず、グラフや設問文に糸口を見いだしながら各地域を判別する必要がある。受験生にとって初見であろうこのグラフから、どの情報を取り出して考察するかポイントだ。時期とGDPの多寡や推移から、B地域は産業革命から帝国主義の時代に向かってGDPの伸びが著しい西欧、人口や地域規模からほかの2つの地域と比べてGDPが小さいことが予想できるC地域が日本、残るA地域が中国となる。

また、グラフは、いずれも時代が進むにつれて増加傾向にあるが、A地域だけ1820年から70年にかけて

て減少している。A地域の「1820年以降の減少は何が原因か」という疑問から思考を巡らせ、アヘン戦争などの列強進出を想起して、A地域を中国と判別することもできる。

様々な視点からアプローチし、「なぜ、そうなるのか」という因果関係を考えていくと、グラフの変化と連動して理解でき、「評価すべき具体的な能力(案)」にある「歴史資料をよみとき、歴史に関する重要な情報を取り出す力」及び「歴史上の出来事や事象の因果関係、歴史上の出来事と現在との関係を多面的・多角的に考察する力」にかなう。資料は多岐にわたるが、変化の特徴や差異に注目し、その因果関係を歴史事象と関連づけて考察することが大切だ。

◎論理的思考力と仮説や推論を立てる力

問4では、旧ソ連地域を示す折れ

線グラフを題材に、同地域における18世紀のGDPが上昇傾向を示す理由が扱われた。先生と生徒4人の会話文を読み、生徒2の「工業化が進んだ」という仮説の裏づけにあたり、不適切なデータを判別することが求められた。正答に至るためには、直接的に世界史事項が必要とされるこれまでのテストと異なり、世界史の基礎事項を基に会話文を理解し、ロシアの工業化について考察する設問だ。

工業化の判断に際しては、農奴数や戦死者数のデータは直接かわりがないため、ほかの3つのデータと区別される。本問では、仮説を裏づける論拠が問われている点が目新しく、先にも触れた「評価すべき具体的な能力(案)」の「資料と歴史上の事象との関わりを推論する力」「資料等の根拠に基づいて、論理的に表現する力」が意識されている。

また、ここでは会話文という形式が用いられ、4人の生徒の意見(仮説)が述べられている。「重視すべき学習のプロセス(案)」には、論拠に基づいて情報を整理し、多面的・多角的

な考え方を理解することが掲げられている。このことから、個々の意見について「なぜ、そう言えるのか」といった論拠をもって議論し、理解する姿勢が重要である。

◎基礎・基本事項の知識・理解は必須

上記で触れた「重視すべき学習のプロセス(案)」や「評価すべき具体的な能力(案)」では、ほかに「日本を含む世界の歴史の複合性や関連性を理解する力」などが示されている。それらも含めて各種能力が求められているが、その前提として、世界史の学習における基礎・基本の定着の必要性が各設問からうかがえる。細かい知識の定着に労力を割く必要はないが、必要最低限の知識をしっかりと理解することが大事だ。

これまでは知識そのものが求められる傾向が強かったが、今回の設問では、知識を活用して、正答への多面的・多角的なアプローチが重視される。正答が1つとは限らない形式の設問では、なおさらだ。これまでに、相互の関連性も踏まえた基本事項の着実な理解を目指したい。

## 「覚える授業」から「考える授業」へ 授業のあり方の根本的な転換が必要

長野県長野高校 教頭 小川幸司



おがわ・こうじ  
教職歴27年。教頭として同校に赴任して2年目。

### 資料を読み込む力がないと 解けない問題

私は以前、戦後の60年間で世界史の教科書の巻末の索引数が、どれぐらい増えたかを調べたことがありません。結果は1300から3800にまで激増していました。膨大な歴史用語を生徒に覚えさせることに汲々（きつぱつ）としているのが、教師の現状です。そうした中で、中央教育審議会で世界史や日本史のあり方について議論されているのは、知識詰め込み型の指導から脱却し、生徒の思考力・判断力・表現力を伸ばすためには、世界史や日本史はどうあるべきかを巡ってのことであると、私は捉えています。

次期学習指導要領で導入予定の必修科目「歴史総合」（仮称）では、歴史の転換点における「継続と変化」「原因と結果」「類似と差異」について、資料の読み取りや議論を通じて、考察を深める活動を重視することが示されています。「歴史総合」のみならず、世界史や日本史でも、この延長線上で授業を展開することが求められるでしょう。その際、歴史用語の扱いについては、「研究者と教員との対話を通じて、歴史を考察する手立てに着目するなどして構造化を図る」ことが打ち出されています。習得する歴史用語を精選した上で、「覚える授業」から「考える授業」への転換を図ろうというわけです。

そのような観点で今回の問題イメージ例を分析すると、世界史や日本史の今後の方向性と求められる指導が、より明確に見えてきます。

今回の問題は、資料を読み込む力

がないと、絶対に解けないものです。しかも、日本、中国、西欧、旧ソ連という異なる地域の数世紀にわたる政治・経済・社会の変動を理解していなければなりません。まさに歴史の継続と変化を読み取る力や、地域間の類似と差異を比較する力が問われます。また、問題文中に出てくる歴史用語からは、詳細な知識よりも、歴史を考察する力を測ろうとしていることが感じ取れます。

### 生徒を揺さぶる問いを 授業の中で発していく

これまでの歴史の授業では、「（ ）の中に入る語句は何か」「を説明しなさい」といった問題に対応できる力を身につけさせておけばよかったとも言えます。しかし、今後はそうはいかなくなります。

例えば、フランス革命は、一般には1789年のバスティーユ牢獄襲撃が革命の勃発とされていますが、見方を変えれば違う答えを導き出すことも可能です。そこで、生徒には、フランス革命が起きた年号ではなく、「あなたは何をもちつてフランス革命の始まりとするか」と問うことが大切

になります。そして、様々な資料を基に、根拠を挙げながら自分なりの答えを導き出していくことを重視するので。その過程で、生徒は、歴史を考察するために必要となる視点や方法を獲得していきます。

そうした指導を行うためには、授業のあり方を根本から見直す必要があります。もちろん、基礎的な知識の習得は不可欠ですが、それだけで授業を終わらせてはいけません。私の授業では、知識解説は1コマの前半で効率よくまとめ、後半は生徒に問いを発することに充ててきました。

例えば、フランス革命時の人権宣言について学んだ後に、その対象に女性が含まれていなかったことや、フランスではほかの西欧諸国と比べて女性参政権の実現が遅れたことを示して、「なぜだと思う？」と生徒に問いかけます。そして、資料を調べさせたり、討論させたりしながら、当時のフランスにおける人権の概念や内実をより深く考えさせるわけです。

これからの指導では、生徒の思考を揺さぶる効果的な問いをいかに発していけるかが、教師に求められると思います。